

# ABッ型オノマトペの発生小考

梅 崎 光

(2007年10月23日 受理)

On the Origin of AB-t type Mimetic Words

UMEZAKI Hikaru

## ■0.

現代日本語オノマトペの諸形態のなかに下記のようなものがある。

- (1) a. AB      がば ひし むず  
 b. ABッ    がさっ どろっ ほさっ  
 c. ABン    がらん どかん ぼつん  
 d. ABリ    きらり さらり ひらり  
 e. AッB    すつく どつか はっし  
 f. ANB     むんず ざんぶ わんさ  
 g. AッBリ ばっさり かつくり につこり  
 h. ANBリ こんがり どんより ふんわり

このうちのeとfのタイプについて、田守育啓/ローレンス・スコウラップ1999は「かなり古めかしい響きを持ち、現代日本語においては珍しい形態であると言える」[23頁]とのべる。

このような指摘は、たとえば日向茂男1991の報告などによってもうらづけられる。そこで調査対象となった804語のうち、(1)にあげた諸形態は(2)のような分布をしめす。

- (2) AB    ABッ    ABン    ABリ    AッB    ANB    AッBリ    ANBリ  
 4      63      28      16      7      1      73      22

しかし、文献資料のしめすところによれば、こうした形態のオノマトペも、中世後期の中央語においては一般的な形態のオノマトペとしてもちいられていた。この点は従来も、たとえば鈴木雅子1984に、

\*AッB    \*AッBAッB    ドッピ    ニッコ    ポッテ    カッシカッシ    ヒッカヒッカ  
 ・御心もとなく思ひて、かつばと起きて走り廻りて見るに (伽・梵天国)

室町期に例が多く70種ほど。この時期がこの型の最盛期で、近世になるとAッBリ型がぐんと増えて、この型は減る。反復型も10種ほどある。 [176頁]

と指摘されているところである。

一方これとは逆に、(2) にみられるように現代においてごく普通に使用されている「ABッ」のような形態は、近世以前の文献資料に例をみることがほとんどない。たとえば、『日葡辞書』には(3) のような諸形態はみられるが、「にこつと、びしゃつと」のような形態はみいだせないのである。

- (3) a. Fixito. ヒシト (ひしと) 副詞. 全く, すっかり, または, わざと, 効果的に.  
[邦訳日葡辞書252頁]
- b. Tofon. トホン (とほん) ただひとり何もしないで居るさま.  
[邦訳日葡辞書656頁]
- c. Bixarito. ビシャリト (びしゃりと) 副詞. 物がつぶれる時の音の形容. たとえば, 熟柿がつぶれるとか, 腫物がつぶれて口があくとか, 卵がこわれてつぶれるとかする時の音について言う.  
[邦訳日葡辞書58頁]
- d. Nicco. I, niccoto. ニッコ, または, ニッコト (につこ, または, につこと) 副詞. 微笑するさま.  
Niccorito. ニッコリト (にっこりと) 同上.  
[邦訳日葡辞書462頁]
- e. Danbuto, I, danburito. ダンブト, または, ダンブリト (だんぶと, または, だんぶりと) 副詞. 水の中などに石を投げ込む時の水音の形容.  
[邦訳日葡辞書180頁]

従来、この「ABッ」型の発生に関してはどのような説明がされているのであろうか。たとえば、日本語オノマトペにおける「ばたり：ばたっ」「ぼきり：ぼきっ」のような対応を有する形態相互の関係から、「ABッ」型の発生を次のような通時的な派生過程とみる説がある<sup>(81)</sup>。

(4) 基底形	/batari +to/	/pokiri +to/
母音消去	batarϕ +to	pokirϕ +to
完全同化	batat +to	pokit +to
表層形	[bataQto]	[pokiQto]

これは下記のような四段動詞における非音便形と促音便形との対応にもみられる「一般的なもの」だという。

(5) 文語形	/uri +t/	/iki +te/
母音消去	urϕ +t	ikϕ +te
完全同化	ut +t	it +te
現代形	[uQte]	[iQte]

このほかにも、「のつと (<のりと、祝詞)」のように、語彙的にCV拍が促音におきかわって生じた形態が存在する。そうした点を考慮すると、(4) のような派生による説明は一定の説得力をもっているが、なお検討すべき課題ものこされているようにおもう。

以下、文献資料における「ABッ」型の出現状況を観察し、どのようにしてこうした形態が生じるにいたったのかについて検討する。

## ■ 1.

まず中世における抄物の例を観察する。さきに引用した鈴木雅子1984では、近世における「ABッ」型の例として、「毗にほろつと雫るは (浄・傾城無間鐘)」という例をあげる。その例に付された注に、

前掲、注(25)の論文〔引用者注：国金順子「抄物の象徴詞」(『学習院大語国文学会誌』一九、昭和五〇年・一九七五)のこと〕によると、中世に抄物にこの型がみられ、近世では雑俳・浄瑠璃・洒落本に数例。恐らく口語では使われたであろうが、文字の上にはあまり現れず、近代に入って代表型の一となる。 [200頁]

とあるように、ABッ型の最初期の例として抄物に例があるとされている<sup>(82)</sup>。

ここで言及されている国金順子1975は、抄物にみえる「ABッ」型の例としてつぎのような語形をあげる。その語が出現するとされる文献名とともにしめす<sup>(83)</sup>。

- (6) a. カリット 三百則抄 (延宝五年板)  
b. ズイット 勝国和尚再吟  
c. スクット 鉄外和尚代抄 (無刊記板)  
d. トソット 三百則抄 (延宝五年板)

いずれも洞門抄物とされる資料にみえる例としてあげられているのであるが、このうちcの「ズイット」のみは、

- (7) ずいつと (副)「ずいと」の強調形。「鷹過長空無一物、ズイット透タル跡二ハ、雀デマレ鳥デマレナイゾ」(人天眼目抄商量一)「サテモ殊勝ナコトデハソウヌカ。目前ノ意識キガズイットカワイテ、全体寒灰古木ニ打ナツタゾ」(祖菊下詔)

のように、辞書の項目<sup>(84)</sup>としても掲出されている。他の3例はそれぞれ以下の箇所によるものとおもわれる<sup>(85)</sup>。

- (8) a. 此ノ僧ノ以タ拳ハカリツト落チタソ [『三百則抄』巻2-28丁ウ]  
b. 徳山モ不立<sub>レ</sub>仏殿<sub>レ</sub>僧入<sub>レ</sub>門看<sub>レ</sub>テ便棒スクツト扣キ出シ棒殺レタゾ [『(大中十七世) 鐵外和尚代鈔』巻1-32丁オ]  
c. アマリ老々大々トシテ、似合ヌ働、卒爾デ走ゾトソツト些子ニ當ツタゾ [『三百則抄』巻4-23丁オ]

しかしながら(8)の諸例を「ABッ」型の確例とみなすには留保が必要であるようにおもう。(8a)は「拳ハカリ、ツト落チタゾ」とも解せそうである。(8b)は「便(すなわち)棒ス。クツト扣キ出シ、棒殺(ぼうさつ)シタゾ。」というように、「棒ス」の箇所を「棒でたたく」という意味の動

詞として解釈できるのではあるまいか。おなじ『三百則抄』に「便棒スルガ」〔巻3-2丁ウ〕という例もある。(8c)は、「トソトソト、トソト、トソツト、トソリト、トソツリト」のような同一語根から派生した形態がほかにみあたらないのが難点である。

また、洞門抄物にみえるオノマトペを一覧した金田弘1976にもつぎのような用例があげられている。

- (9) a. スイツト／白午ノスイツト白ク作タルヲ以テ月無イ処へ至ル也。(門戸・30ウ) [254頁]  
 b. ズイツト／ズイツト走タモ只分明為極飢令所得遅カレシメタゾ。(天・無・7オ) [254頁]  
 c. チクツト／自己ニ無イ場当着ノ只チクツト脱却シタ時只江月—吹タ迄ヨ。(門戸・17オ) [257頁]

以上のように、抄物のうちには「ABッ」型の例とみられる例が少数ながら存在することが認められる。これらの語はどのような経緯で発生したとかがえられるであろうか。

さきにのべた「ABリ」型からの変化として説明するたちばからは、たとえば(9) bとcとはそれぞれ下記のような過程によって成立したことになる。

- (10) a. チクリト → チクツト  
 b. ズイリト → ズイツト

上記(10a)のような派生はすなおに首肯できよう。「チクリト」という語の存在が確認できるからである。

- (11) Chicurito. チクリト (ちくりと) 副詞. 少し. [『邦訳日葡辞書』120頁]

一方、(10b)に関しては、このような派生による説明が妥当かどうか疑問である。過去の文献資料に「ズイリト」という語がみえないからである。

無論、現在のこざれている文献に出現しないからといって、ただちに「ズイリト」という語が存在しなかったことにはならない。しかし、わざわざそうした語の存在を必要としない解釈があれば、それにこしたことはない。

ここにおいて(12a)のように「ズイト」という語の存在が確認されるからには、「ズイツト」の発生は、「ズイト → ズイツト」というように、語根「ズイ」と「ト」とのあいだに促音が挿入されるという派生だとかがえることができそうにおもわれるのである<sup>註6)</sup>。

- (12) a. 橄欖ハ嶺南ニ生ズル物ゾ。木ガズイト高テ、スグナゾ (山谷詩集鈔 十五)  
 b. 此卦ハイカニモシハウテ、チクト身斗持卦ゾ (周易秘抄下)

そう考えることができるとすれば、「チクツト」の方も(12b)のような「チクト」からの変化という、「ズイツト」とおなじ過程によってその発生を説明しうる。

当然ながら、《まず「チクリト」のような実在する「ABリ」型語彙のうち「チクト」のような「AB」型とも対応関係をもつ語群において「ABリ → ABッ」という変化が生じ、そののち、

「ABリ」型と対応関係にない「AB」型語彙にも「ABッ」型の派生が波及した》というようなかんがえはとらない。そのような変化がおこったなら、「チクリト：チクツト」のような、対応する「ABリ」型をもつ「ABッ」型の例がもっと大量にみられるはずだからである。

またそもそも、「ABリ」型にしる「AB」型にしる、ともに構成要素として語根「AB」をもつのであるからには、通時的に「リ→促音」という過程を経由せずとも、その「AB」語根に促音が添加されるという語形成過程によって「ABッ」型が派生することも可能である。そうかんがえたばあい、ではなぜそうした語形成が過去の日本語においては不活発だったのか、という問題がのこる。

さて以上のように、たしかに抄物には「ABッ」型がみられるのではあるが、その用例が洞門抄物にかたよっていることに注意したい。よくしられているように、洞門抄物は東国語を反映した文体をその特徴とするのである。

洞門抄物におけるオノマトペの形態は、金田弘1976に一覧がしめされている。ここでは「指定辞ダの使用」「推量辞ヨウの使用」「ハ行四段動詞連用形促音化」「形容詞連用形原形の維持」「条件句を作るウニハの使用」にくわえて指摘しうる洞門抄物の言語的特色のひとつとして、「敬意を表わす命令辞シ(イ)・サシ(サイ)」とならんで「カラリット型擬態語の多用」があげられている[20頁]。

カラリット型擬態語とは、「ABリ」型の語末に促音が添加されたもので、金田1978にあげられた語例を引用すると、つぎにしめすような形式のことである。

- (13) a. イラリット／…〔中略〕…イラリットシタ事ガ在ゾト見タゾ。(大・報・下38オ)  
 b. カラリット／ツリー星事モナク、カラリットシテ虚舟如v駕v波。…〔中略〕… (大・古・19オ)  
 c. ガラリット／四—打ト、鈴ヲ根タモ此ノ誰ノカヨ。ガラリットフル則バ天下ノ供ニ一粒モ残サスト云モ此ノ誰ノカヨ。(竜洲・十21オ)

金田1978では以下、「キラリット、ギラリット、ダラリット、チラリット、チロリット、トロリット、ドロリット、ヌラリット、ハラリット、バラリット、フラリット、ブラリット、ペロリット、ホロリット」の諸例をあげる。このほかにも、国金論文では「クラリット、クルリット、スラリット、トラリット、ヒヤリット、ヒラリット、ホラリット」という語の存在が報告されている。

以上のように、オノマトペの使用において特徴をもつ洞門抄物に、「ズイツト」や「チクツト」のような「ABッ」型オノマトペの使用が偏在するということは、中世において「ABッ」型の例がみとめられるにしても、地域的に限定された性格なのかもしれない。

## ■2.

たとえば、『日本国語大辞典』第二版では、近世における「ABッ」型の例としてつぎのような用例をあげる。

- (14) a. ずばっと \*浄瑠璃・四天王高名物語(1662)三「きりきりと引しぼり、かなぐりはなしに、かっきといた〈略〉うしろにひかへたる、川村兵へか、馬のふとばらに、すはっと立」
- b. どかっと \*浄瑠璃・傾城八花形(1703)三「女郎どかっとねぢすはり」
- c. ほろっと \*浄瑠璃・傾城無間鐘(1723)二「吡(まじり)にほろつと零(こぼ)るは、露かあらぬか初梅の」
- d. げそっと \*太筭集-四(1835-39)「初雁 げそつと腹が減て来る」
- e. ちょびつと \*雑俳・名取杖(1858)「かしこいかしこいもふちよびつとでしまひやぜ」

このほか、初版では「のろつと」の項目に「\*洒落本・温海土産「上さをば薮ばり、のろつと掛て遣はた」という用例をあげていたが、第二版ではこの例は削除されている。

上記(14e)以外は本文を確認できたのだが、語形に問題のある例がいくつかある。(14a)の例は霞亭文庫所蔵本(寛文二年刊記)では「すはつと」とある<sup>(67)</sup>。(14b)の底本は「徳川文藝類聚 八」だが、新潮日本古典集成『浄瑠璃集』(底本：京都大学文学部図書室蔵、八行本。参考本：東京大学附属図書館蔵、十行本。同：大阪大学附属図書館蔵、絵入十八行本)58頁には「女郎屋どつかと振坐り。」とある。(14c)の底本は「近代日本文学大系」だが、『紀海音全集第七巻』(清文堂出版、底本は東京学芸大学所蔵本)148頁には「まじりにほろとこぼるゝは」とある。(14d)は『雑俳集成1期12巻 天保名古屋狂俳集』(東洋書院、1985年)「狂俳冠句太筭集 四編」114頁に「初雁 げそつと腹が減て来る」とある。名古屋で成立したものであり、資料の地域性を考慮する必要がある。

従来指摘されている「ABッ」型の近世における用例は上記の範囲をでないようである。しかも上記のように確例にとぼしい状況である。

このうち(14a)の例は近世におけるもつともはやい時期の「ABッ」型の例であるが、『日本国語大辞典』第二版では「[補注]用例の清濁は明らかではない。」と注する。語義との対応からみると、(14a)は「ずばっと」ではなく、同辞典が「兎一疋追出し、弓矢取て打つがひ〈略〉羽ぶくら込めてずとはたち」(浄瑠璃・蟬丸-二)という例とともに立項する「ずわと」と対応する「ずわつと」という例なのではあるまいか。前節で問題にした「ABリ」型との対応関係からみても、「ずばり」との用例がみだせるのは近代になってからであり、「ずばり → ずばつと」という過程で「ずばつと」の発生を説明するのはむずかしい。

### ■ 3.

以上のように、文献資料にみえる中世から近世にかけての例をみるかぎり、「ABッ」型オノマトペの発生を(4)のような通時的な派生としてとらえる必要はないのではあるまいか。

さきに、《「ABリ」を經由せずに「AB」語根に促音が添加されて「ABッ」型が派生する》というかんがえをのべたが、こうした語形成が可能となった契機として、「A」型・「AB」型の衰退をかんがえたい。

まず、中世末期の状態について、「さと」「にこと」を例に図式的にしめすと以下ようになる。

- (15) /き/ (さと) → さつと  
 /にこ/ にこと → につこと  
 にこりと → につこりと

「さつと」の方は、その発生がはやく、中世末期においてすでに語根1拍オノマトペのなかで無標となっており、「さと」のような「A」型の方は廃用にむかいつつあったのだろう。平弥悠紀1998にしめされたデータによると、「Aト」と「Aット」とのとなり語数では後者の方が量的に優位なのである。それに対して、「ABト」と「AッBト、AンBト」とを比較しても、それほどおきなひらきはない<sup>(68)</sup>。

- (16) 抄物
- |     |      |      |      |
|-----|------|------|------|
| Aト  | Aット  | Aント  | Aウド  |
| 8   | 26   | 2    | 10   |
| ABト | AッBト | AンBト | ABント |
| 40  | 42   | 0    | 0    |

- (17) 日葡辞書
- |     |      |      |      |
|-----|------|------|------|
| Aト  | Aット  | Aント  | Aウド  |
| 1   | 15   | 4    | 5    |
| ABト | AッBト | AンBト | ABント |
| 17  | 23   | 3    | 1    |

- (18) 虎明本狂言
- |     |      |      |        |
|-----|------|------|--------|
| Aト  | Aット  | Aント  | Aウト(ド) |
| 4   | 15   | 5    | 8      |
| ABト | AッBト | AンBト | ABント   |
| 12  | 21   | 1    | 1      |

このうち、「にこと」のような「AB」型も次第に口頭語からはすがたをけし、それにともなってその強調形であった「につこと」のような「AッB」型もうしなわれる。

- (19) /き/ (さと) さつと  
 /にこ/ (にこと) → につこと  
 にこりと → につこりと

ここで語根1拍形式の「さつと」に対応する「つと」形式が空白になったわけであり、そこをうめるようにして「にこつと」が発生したのであろう。こうした過程によってオノマトペ形態における

体系性が維持されたのではあるまいか。

(20) /き/ (きと) さっと  
 /にこ/ (にこと、にっこ) にこっと  
 にこりと → にっこりと

以上のような想定からは、「ABッ」型の出現をおさえていたのは「Aッ(ン)B」型の存在だということになる。このとき、あらためて「Aッ(ン)B」型の衰退過程が問題になるが、これに関してはなおよくかんがえてみたい。

## 注

- (1) 田守育啓1993「日本語オノマトへの音韻形態」(筧寿雄/田守育啓:編『オノマトピア 擬音・擬態語の楽園』勁草書房) 6頁
- (2) 狂言やキリシタン資料には「ABッ」型の例はみられないようである。
- (3) 同論文には「クワット」「ヒヤット」も「ABット」の例としてあげられているが、これはのぞくべきであろう。
- (4) 『時代別国語大辞典 室町時代編』による。
- (5) 駒澤大学電子図書館「禅籍・仏書画像データベース」による。URLは下記のとおり。  
<http://www.komazawa-u.ac.jp/~toshokan/el/zenbussho4.html>
- (6) (12) にあげた2例は『時代別国語大辞典 室町時代編』による。
- (7) 電子版霞亭文庫 (<http://ka.teibunko.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/katei/>) の画像ファイルによった。所在は11/20コマめ。
- (8) (16) ~ (18) の表は平弥悠紀1998における表をもとに必要な改変をくわえたものである。「抄物」「虎明本狂言」のもとのデータは大坪併治1989によるとのことである。

## 参考文献

- 大坪併治1989『擬声語の研究』明治書院
- 金田弘1976『洞門抄物と国語研究』桜楓社
- 国金順子1975『抄物の象徴詞』『学習院大國語国文学会誌』19
- 鈴木雅子1984『擬声語・擬音語・擬態語』(鈴木一彦/林巨樹:編『研究資料日本文法第4巻 修飾句・独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』明治書院)
- 田守育啓/ローレンス・スコウラップ1999『オノマトペー形態と意味』くろしお出版
- 日向茂男1991『語形からみた擬音語・擬態語』『東京学芸大学紀要第2部門人文科学』42
- 平弥悠紀1998『中世末期の音象徴語の語基—『日葡辞書』を中心として—』『国語語彙史の研究』第17集、和泉書院